【日本の大学】第 15 回――神戸大学：学理と実学の調和掲げる

国際的な港湾都市である神戸市に 1949（昭和 24）年 5 月、第 2 次大戦前から地元にあった多くの学校を包摂して設立されたのが国立大学の神戸大学である。

神戸大学につながる系譜は、1869（明治 2）年に開院された神戸病院に始まる。同病院に付属医学所が併設（1876 年）されたり、病院の公立化、県立病院化されたりして、のちの医学部につながる流れや、兵庫県師範伝習所（1874 年）から神戸師範学校へ（77 年）など、のちの教育学部や文学部へつながる変遷もある。

神戸大学正門（正面、撮影：張燕波）

神戸大学正門（側面）

神戸大学では、こうしたそれぞれの系譜がある中で、1902（明治 35）年 3 月に設立された神戸高等商業学校（神戸高商）をもって大学の創立の起点としている。神戸高商は日本で 2 番目に設立された官立高等商業学校であるが、第 2 次大戦までの間に、神戸商業大学（のちに神戸経済大学）、同予科、付属専門部などに枝分かれしながら発展・拡大した。

また、1923（大正 12）年設立の姫路高等学校、1921（大正 10）年の神戸高等工業学校や、師範学校の流れとして兵庫師範学校、同青年師範学校などもそれぞれ歴史を紡いできた。戦後の神戸大学設立は、それら各校を包摂した形で誕生した。

以下、同大学のホームページなどからこれまでの歴史や現況を見ていこう。

神戸大学はその使命として以下のように定める。「開放的で国際性に富む固有の文化の下、『真摯・自由・協同』の精神を発揮し、人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する『知』を創造するとともに、人間性豊かな指導的人材を育成する」

神戸大学は設立当初、文理学部、教育学部、法学部、経済学部、経営学部、工学部の 6 学部でスタートした。付属図書館も開かれ、経済系研究所も付設されている。また、経済学部と経営学部には第 2 課程（夜間部）が設置（法学部は 55 年）された（第 2 課程は、21 世紀に入って、3 学部とも廃止され、昼間主コース、夜間主コースに再編されている）。

教養課程の教育は神戸教養課程（のちの御影分校）と姫路分校とに分かれて行われた。

経営学部と経済学部が入居した神戸大学本館（正面）

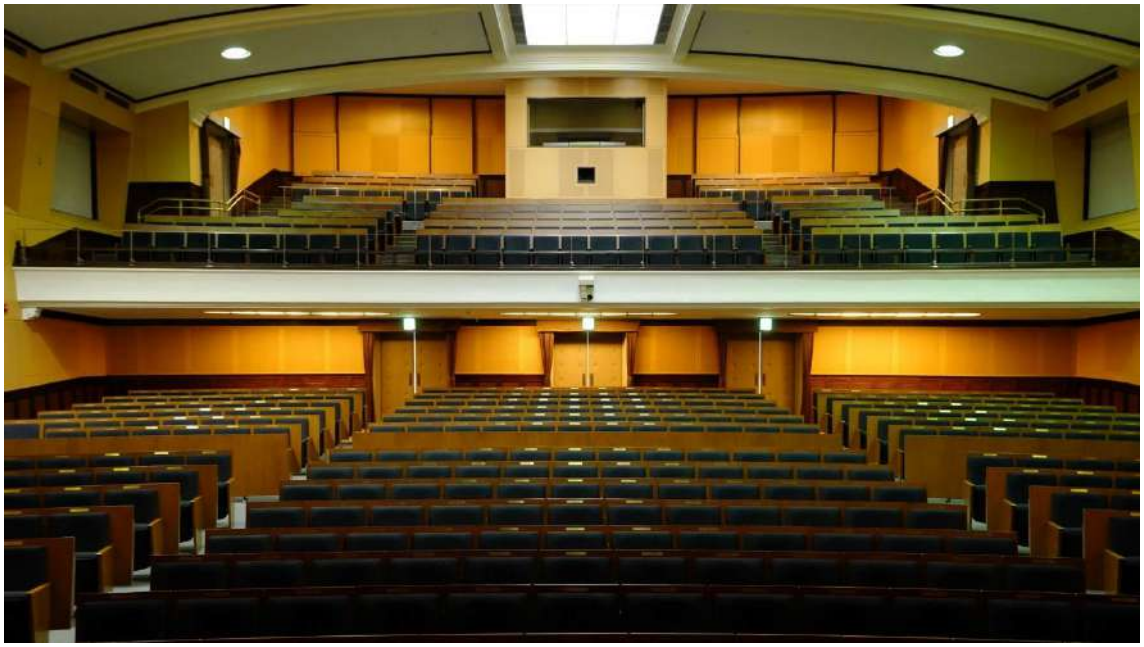
経営学部と経済学部が入居した神戸大学本館（側面、撮影：張燕波）

日本初の経営学部

前身の神戸高商が、学理よりもより実践的な実学教育を重視したこともあって、神戸大学も日本で最初の経営学部を設置したのが特色であった。建学の精神も「学理と実際の調和」を理念として掲げている。経営学部は、日本における経営学・会計学・商学の総本山であり、この分野の研究と教育に関して、常に日本のトップランナーであるとの自負を持っていると言えよう。

1953（昭和 28）年には、法学、経済学、経営学の大学院研究科が設置された。翌 54 年には、文理学部が文学部と理学部に分離されている。

1963（昭和 38）年に教養部が発足。翌 64 年には県立神戸医科大学の国立移管によって医学部が加わることになった。また、66 年にはこれも県立兵庫農科大学の移管によって農学部の誕生となった。



出光佐三記念六甲台講堂（座席）

1960 年代は、六甲台地区への学舎統合が始まり、医学部と一部の施設を除くほぼすべての学部が、68（昭和 43）年までに六甲台地区に集結された。医学部付属病院、同看護学校も移管により設置されている。

1968 年から大学紛争が神戸大学にも波及し、同年 12 月から翌年にかけて学舎の封鎖などが続いたが、翌年後半には沈静化している。

1992（平成 4）年、教育学部・教養部を改組、発達科学部と国際文化学部となった。また、学部から独立した研究科として文化学研究科（1980 年）、自然科学研究科（81 年）に続いて 3 番目の国際協力研究科が 92 年に発足している。

六甲台第 1 キャンパスから海

商船大学と統合

2003（平成 15）年には、神戸商船大学と統合し、11 番目の学部として海事科学部が誕生した。海事科学部も他大学に見られない特色のある学部である。

2007（平成 19）年には、大学院研究科の中で、理学、工学、システム情報学、農学、海事科学の 5 研究科に加えて、自然科学系の 5 研究センターが参加する学際組織として「自然科学系先端融合研究環」を設置した。また 16（平成 28）年には「先端融合研究環」へと改組するなど、文系・理系分野の融合を意識した横断的な研究開発や人材の育成に力を入れている。

2017（平成 29）年には、国際文化学部と発達科学部を統合して国際人間科学部となったため、現在は、10 の学部（文学部、国際人間科学部、法学部、経済学部、経営学部、理学部、医学部、工学部、農学部、海事科学部）と 15 の大学院研究科（人文学、国際文化学、

人間発達環境学、法学、経済学、経営学、理学、医学、保健学、工学、システム情報学、農学、海事科学、国際協力、科学技術イノベーション）と経済経営研究所、医学部付属病院、さらに教育研究に携わる多数のセンター群、複数の図書館を保有している。

社会科学系図書館（大閲覧室）

キャンパスは、中心の六甲台のほかには、ポートアイランド地区には、先端融合研究環統合研究拠点、医学部付属病院国際がん医療研究センターなどがあり、兵庫県西部の加西地区には農学研究科付属食資源教育研究センターが、また、楠地区には医学研究科、医学部付属病院などがある。

学生数は、学部在籍者が 11521 名（うち女子 4179 名）、大学院 4559 名（1575 名）、外国人留学生数は 1227 名（うち女性 642 名）、教職員数は 3734 名である。（2020 年 5 月現在）

現在の学長は、14 代目の学長である武田廣氏である。東大大学院の理学系研究科を修了し、東大理学部助教授から神戸大学理学部教授、同理学部長などを経て 2015（平成 27）年に学長に就任。専門は高エネルギー物理学（素粒子実験物理学）である。武田氏の任期は 2021 年 3 月末であり、現在、次期学長の選考が行われている。

大学の運営方針としては次のような「方向性」を定めている。

「伝統を発展させ、様々な連携・融合の力を最大限に発揮する卓越研究大学として世界最高水準の教育研究拠点を構築し、現代及び未来社会の課題を解決するための新たな価値の創造に挑戦し続ける」として、「研究」「教育」「国際」「社会貢献」の 4 分野での方向性を示している。「研究」では、文系・理系という枠にとらわれない先端研究を推進し他大学・研究機関とも連携して、新たな学術領域を開拓・展開する。「教育」では、先端研究の臨場感の中で創造性と学識を深め、地球的諸課題を解決するために先導的役割を担う人材を輩出する。「国際」では、海外中核大学と協同研究や連携教育の重層的な交流を図り、グローバル・ハブ・キャンパスとしての機能を飛躍的に向上する。「社会貢献」では、教育研究を社会と協働して推進し、先端的技術の開発と社会実装の促進を通じて人類に貢献する―――としている。

こうした「方向性」を追求することによって大学の「目指す水準」として掲げたのは「世界最高水準の教育研究を行う大学」であり、その具体的な目標として「世界ランキングトップ１００位以内」「国内ランキングトップ 5 位以内」を実現するとしている。

なかでも、神戸大学では「学際融合」「異分野連携」を積極的に進めている。特に、文・理融合の顕著な取り組みとしては 4 年前に設置した「科学技術イノベーション研究科」を挙げることができよう。同研究科は、自然科学分野で得られた研究成果を社会へ還元する事業創造に焦点を当てた分離融合型の独立大学院であり、すでに、この研究科から複数の大学発ベンチャー企業が誕生している。

同研究科は「バイオプロダクション分野」「先端膜工学分野」「先端 IT 分野」「先端医療学分野」と事業創造に焦点を当てたアントレプレナーシップ（起業家精神）との融合による日本初の文理融合型大学院である。先端膜工学は膜を用いて水浄化やガス分離を行うことで、省エネ・創エネプロセスによる資源循環型社会の実現を目指す分野で、すでに 2007（平成 19）年に、先端膜工学センターも設置されて研究が進んでいる。

六甲台第１キャンパスの看板

発達科学に力点

教育学部を淵源に持つ「発達科学部」（現在は国際人間科学部に改組）も、極めて学際的だと言えよう。同部は、人間の発達を多面的にとらえて、それを支える環境を創造する学部であると規定している。人は、生まれた瞬間から発達を始める。子供の時はもちろん、歳をとっても健常な人も障害を持つ人も、さまざまな学びを通して、それぞれが潜在的に持つ多彩な能力を顕在化させていく。

同部では、文系・理系、理論系・実践系、基礎系・応用系を問わず、いろいろな学問的知見を総動員して、人間の発達とそれを支える環境を研究している。そのため、きわめて多岐にわたる専門の教員・学生・研究者が結集して絶えず密接に交流しながら研究活動を進めている。

出光佐三記念六甲台講堂前

日文：滝川　進

写真は署名のもの以外は神戸大学 HP から